

A年大斎節第1主日 マタイ4章1―11節

〔直訳〕

1 その時 イエスは 導かれた 荒野に 霊によって

試されるために 悪魔によって。

2 そして 断食して 四十の日を そして 四十の夜を、
その後 彼は飢えた。

3 そして 近づいて 試みる者が 言った 彼に、

「もし 子で あなたがあるなら 神の、

言いなさい ように これらの石が パンに なる。」

4 だが答えて 彼は言った、

「書かれている、

『ではない よって パンのみに 生きるだろう 人間は、

そうではなく よって すべての 神の口を通して出て来る言葉に。』」

5 その時 連れて行く 彼を 悪魔は 聖なる町に、

そして 立たせた 彼を 神殿の屋根の端の上に

6 そして 言う 彼に、

「もし 子で あなたがあるなら 神の、

投げなさい 自分を 下に。

なぜなら書かれている 次のことが

『彼の天使たちに 彼は命令を下すだろう あなたのために

そして 手の上に 彼らは取り上げるだろう あなたを、

ないように あなたが打ち当てる 石に対して あなたの足を。』

7 語っていた 彼に イエスは、

「また 書かれている、

『あなたは試験すべきではない 主を あなたの神を。』」

8 また 連れて行く 彼を 悪魔は 非常に高い山に

そして 彼は示す 彼に すべての世界の王国とそれらの栄光を

9 そして 彼は言った 彼に、

「それらを あなたに すべてを 私は与えるだろう、

もし 伏して あなたが礼拝するなら 私を。」

10 その時 言う 彼に イエスは、

「立ち去れ、サタンよ、

なぜなら書かれている、

『主を あなたの神を あなたは礼拝すべきだ

そして 彼 ひとりに あなたは仕えるべきだ。』」

11 その時 離れ去る 彼を 悪魔は、

そして 見よ 天使たちが 近づいた そして 彼らは仕えた 彼に。

〔新共同訳〕

1 さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、*「霊」*に導かれて荒れ野に行かれた。2 そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。3 すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」4 イエスはお答えになった。

『人はパンだけで生きるものではない。

神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』

と書いてある。」5 次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、6 言った。

「神の子なら、飛び降りたらどうだ。

『神があなたのために天使たちに命じると、

あなたの足が石に打ち当たることのないように、

天使たちは手であなたを支える』

と書いてある。」7 イエスは、『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」と言われた。8 更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、9 「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と言った。10 すると、イエスは言われた。「退け、サタン。

『あなたの神である主を拝み、

ただ主に仕えよ』

と書いてある。」11 そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。

①構成

霊が登場する1―2節と天使が登場する11節とが、序と結びを作り上げており、その間に悪魔による三度の試みが描かれている（3―4節・5―7節・8―10節）

①a 第一段落（1―2節）

「霊によって」荒れ野に導かれたイエスは、四十日四十夜の断食の後に、飢えを覚える。まだ悪魔は姿を現していないが、この荒れ野が「悪魔によって試されるための」場所となることを書くことによって、緊張が高められる。

①b 第二段落（3―4節）

いよいよ悪魔が登場するが、悪魔とは呼ばずに、「試みる者」と表現することによって、悪魔の意図が表される（1節の「試されるために」はこの「試みる」の受動形）。イエスを神から引き離し、この世を自分の支配に留めて置くことが悪魔の狙いである。悪魔は「もし神の子なら、石をパンに変えられる」と誘う。

①c 第三段落（5―7節）

この段落でも悪魔は「もし神の子なら」と述べて、イエスを試みる。この表現はイエスの十字架の場面を思い起こさせる。十字架につけられたイエスを見た人々は「神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い」とのしり、祭司長たちも「今すぐ十字架から降りるがい

い。そうすれば、信じてやろう。…『わたしは神の子だ』と言っていたのだから」と侮辱している（マタ二七39―43）。

④ 第四段落（8―10節）

二度の試みに失敗した悪魔は、「世界の王国とそれらの栄光」を示し、「もし私を礼拝するなら」、全世界とその栄光を与えると誘う。ここで「礼拝する」と訳された言葉は、「相手の足や裾に接吻し、相手が神であることを示す」動作を表す。悪魔はイエスにとつての神は自分であることを認めるようにと求めている。しかし、イエスは「立ち去れ、サタンよ」と述べ、前のように聖書の言葉を引用して、悪魔を退ける。

⑤ 第五段落（11節）

この段落冒頭の「その時」は1節の「その時」と対応している。1節では、受洗の際に「これはわたしの愛する子」という言葉を天から受けたイエスが、荒野で試みられることへの転換を表していた。ここでの「その時」は、試練の時がひとまず終り、神との憩いへの転換を表している。悪魔が離れ去ると、それに代わって、天使が近づき、イエスに仕える。

② 断食と飢え（1―2節）

① イエスを荒野へと導くのは「悪魔」ではなく、神の「霊」である。受洗の際に、イエスを「わたしの愛する子」と呼んだ神が、「霊によつて」イエスを荒野へと導く。それは試みを通して、神の子であるイエスの正しさが明らかになるためである。荒野は試練の場であるが、同時に真に頼るべき方が誰であるかを体験できる場所でもある（三一参照）

- ① 「悪魔（ディアボロス）」。ギリシア語のディアボロスは「中傷（誹謗）者・ざん言（訴）する者」を意味し、特に「悪魔」を表す。10節ではイエスは悪魔を「サタン」と呼び、「立ち去れ」と命じるが、ヘブライ語のサタンは「訴える者・誹謗する者」の意味であり、サタンが人を悪へと誘う悪魔として登場するのは、新約聖書に近づいてからである。例えば、ヨブ記1―2章に登場するサタンは、地を行きめぐって、人間の悪や不正を探り出し、神に告発する「天の検察官」であつて、いわゆる「悪魔」にはまだなっていない。また、サムエル記下24章と歴代誌上21章は、ダビデが人口調査という悪を行うという同じ出来事を書いているが、古いサムエル記下24章では、神がダビデをそそのかしたのに対して、新しい歴代誌上21章では神ではなく、サタンがそのかしている。ダビデを誘う者が神からサタンに代わったのは、神はあらゆる悪から無関係でなければならぬことが強調されるようになったからである。しかし、新約聖書でのサタンは最初から神の敵対者であり、人間を神から切り離そうとする誘惑者である（マタ四10）。
- ② 「四十日四十夜」。これはモーセがシナイ山で飲食を断った日数であり（出三四28）、また王妃イゼベルに追われたエリヤがホレブ（シナイ山）へと荒野を歩いた日数である（王上一九8）。イエスは四十日四十夜、「断食する」が、断食するイエスは、目覚めて祈る人の模範である（マタ二六41、六16以下、九14以下参照）。

③ 四十日の断食の後に「飢えた」とあるように、イエスは一人の人間として試練を受ける（ヘブ四15）「この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、…あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです」。

③空腹を満たす誘惑（3―4節）

① 飢えは人間を神に逆らわせる要因になる。そこで「試みる者」は、神と親密な関係を持つ神の子であるなら、天からパンが与えられるのは当然であり、イエスが自分の利益のために「神の子」としての権威を用い、石をパンに変えるようにと誘惑する。

② 神からパンが与えられるのを待つのでなく、石をパンに変えようとするのは、神との関わりを捨て、パンに依り頼むことにほかならない。イエスにとって、石をパンに変えることのできる者がメシアなのではない。むしろ神に信頼して、自分の力やパンに依り頼まずに、神の思いに忠実に従う者がメシアなのであり、その道をイエスは歩んでいく。

③ イエスは「書かれている」と述べて聖書の言葉を用い、試みる者の誘惑を退ける。4節は申命記8章3節からの引用である。「神の口を通して出て来る言葉によって生きる」という引用に示されているように、イエスはさまざまな誘惑にも拘らず、神の言葉に自分を従わせる敬虔な義人である。このようなイエスを描くことによって、キリストに従う者が歩むべき道を示している。

④神を試みる誘惑（5―7節）

① 最初の誘惑に失敗した悪魔は、イエスを「聖なる町」（エルサレムを表す）に連れて行き、イエスが依って立つ聖書を引用して、神殿の屋根の上から身を投げてでも大丈夫だ、天使が助けると書いてあるではないか、と誘いをかける。悪魔は、神に依り頼む人に神の加護があると歌う詩編91編11―12節を利用して、イエスを誘惑する。

② 神に完全に信頼している者は、神の助けを試す心を持ち合わせはしないはずである。従って、悪魔のこの誘いはイエスと神の間に不信という亀裂を作り出すことを狙っている。それが成功すれば、悪魔はこの世を自分の支配下に留めることが可能になる。

③ 7節は申命記6章16節の引用。エジプトから脱出し荒野を旅したイスラエルの民は、マサで不平をこぼして神を試みた。かつてイスラエルが受けた試験がイエスにも起こる。しかし、悪魔の魂胆を知るイエスは「主を試験すべきではない」と答えて、悪魔の誘いを退ける。

④ イエスが示す神の子は、すでに旧約聖書が教えていたように、神を「試験する」ことなく、神の求める道を歩む人である（「試験する」は「試みる」の前に強調の接頭辞をつけた動詞）。神が人を試みるのは人に信仰を告白する機会を与えるためであるが、人が神の正しさを試みるのはふさわしいこととは言えない。イエスの栄光は華々しい奇跡によって示されるのではなく、神の言葉に従って十字架へと歩むことによって示される。

⑤悪魔を神とする誘惑（8―10節）

① 「非常に高い山」は、変容の山（二七1）や、復活したイエスが顕現した山（二八16）だと考える人もいるが、見晴らしのよい山であるから、神がモーセに全地を示したネボ山（申三四1）とするのも不可能ではない。また、黙示文学に登場する幻の山を考えることもできる。

② 悪魔は、自分を礼拝すれば、世界中の「栄光」を与えようと申し出る。イエスは「サタンよ、立ち去れ」と厳しく命じて、それを退ける。イエスと神との間には、他のものが入り込むすき間はまったくない。10節は申命記6章13節、10章20節、5章9節を組み合わせた引用。

③ 「立ち去れ、サタンよ」は、マタイにのみ見いだせる表現。16章23節では、ペトロにも言われ

た言葉であるが、ここでは「私の後ろに」が加えられている。

⑥ 神への信頼がもたらすもの（11節）

- ① 「その時、悪魔は彼を離れ去る」。過去の出来事を述べているのに、「離れ去る」と現在形が使われている。これは過去の出来事を生き生きと臨場感をもって叙述するための手法である。
- ② イエスは悪魔の試みを神への信頼を表す機会へと変えたが、そのイエスに神が応える。石をパンに変えようとしなかったイエスのために、天使が給仕し、神殿から飛び降りず、神に仕えたイエスのために、天使が側で仕える。「仕える」と訳した語ディアコネオーは「給仕する」をも意味する言葉である。

⑦ 荒れ野を生き抜く

- ① イエスの受洗の際に、神は「これはわたしの愛する子」と宣言した。それに続く4章1節以下では、イエスがどのような神の子であるのかを明らかにしていく。それと共に、悪魔の試みを通して、イエスは新しい「神の民」の代表者として、さまざまな誘惑をどのように退けるべきかを身をもって教え、間違ったメシア觀をただし、歩むべき道を示す。キリストに従う者の根本姿勢がイエスによって示される。
- ② 悪魔は「神の子なら、石をパンに変えられる」と誘うわけであるから、悪魔にとって、神の子とは飢えから逃れるために石をパンに変える者のことである。イエスはそのような神の子であることを拒否する。神の力を自分のために利用せずに、むしろ「神の口を通して出て来る言葉」に委ねることを選ぶ。
- ③ 悪魔にとっては、神殿の屋根から降りる者が神の子であり、十字架につけられたイエスをのしり侮辱した人々にとっては、十字架から降りる者が神の子である。しかし、イエスは神を試験することなく信頼し、神の言葉に従って神の思いに留まる者が神の子であることを示している。イエスが十字架から降りないのは、十字架こそが神の救いが現わされる場であるからである。
- ④ イエスは最後の誘惑を退け、「立ち去れ、サタン」と命じる。この言葉はフィリポ・カイサリアで受難を予告したイエスをペトロがいさめたときに、「立ち去れ、私の後ろに、サタンよ」とイエスがペトロを戒めたことを思い起こさせる。苦難の道を避けるようにとイエスに求める者は、誰であれ、弟子であってもサタンなのである。しかし、ペトロに対しては「私の後ろに」が加えられている。ペトロは受難へと向かうイエスの前に立ちはだかつて、歩みを食い止めようとはしないで、イエスの後ろに回り、イエスに従うことが求められている。弟子のあるべき位置は「イエスの後ろ」である。
- ⑤ 「神の子なら石をパンに変えることができる」「神の子なら神殿の屋根から降りることができる」「神の子なら十字架から降りることができる」という主張はいずれも、自分の願望を叶えるために神の力を利用するものである。そのような考えを持つ者は悪魔が差し出す「この世の栄光」に惑わされる者でもある。しかし、神の言葉に生きるイエスは自分の願望を神とはしない。人を命の極限に置く荒れ野にあっても、そこを生きると導くことのできる神にイエスは信頼する。神の言葉に信頼し、神の言葉に従う神の子イエスの生きる姿を見る者は、イエスの後ろに回り、イエスの後に従い、多くの苦難が待ち受ける荒れ野を生き抜くことが求められている。